

2015（平成27）年度 安居 法界身義

綜理：浅田 恵真 勸学

本講師：深川 宣暢 勸学 講題：『浄土文類聚鈔』

典議：武田 正晋 司教

会読論題提要

二、法界身義

〔題意〕

法界身の義をうかがい、宗祖の義では、「是心作仏是心是仏」が衆生の事理の観ではないことを明らかにする。

〔出拠〕

『観経』第八像観の文

〔积名〕

「法界」

「身」

〔義相〕

1、諸師の義(浄影寺慧遠・天台大師智顛・嘉祥寺吉蔵など)

①唯識法身の観

②自性清浄仏性の観

2、曇鸞・善導の義

①『往生論註』身業功德の积文

②「定善義」像観の积文

3、宗祖の義

①法界身と名号との関係

②「信文類」一念転积の文

③木火の譬と信心即仏心

「法界身義」判決

【題意】

法界身の義をうかがい、宗祖の義では、「是心作仏是心是仏」が衆生の事理の観ではないことを明らかにする。

【出拠】

『観経』第八像観に「諸仏如来是法界身……是心作仏是心是仏」（聖典全書一・八六頁）等とある文。

【积名】

「法界」とは、事理に通じる名にして、通仏教においては諸法の真実の体性である真如を意味する場合、一切諸法を呼ぶ名にして諸法の事別なるを意味する場合、また、その法界を生ずる心に随えて衆生

の心を法界という場合などがある。この中、聖道諸師は、理に約して法界即身の義ともするが、浄土門では大慈悲が遍満する衆生界とする。「身」とは集成・あつまりの義である。「義」とは意義をいう。

宗祖は、通仏教に順じる用例も示されるが、いまは、「法界」とは、仏が化益する所化の境界である衆生界、「身」とは、能化の仏身である阿弥陀如来をいう。

【義相】

『仏説観無量寿経』の第八像観に、「諸仏如来是法界身……是心作仏是心是仏」とある法界身の義をめぐって種々の理解がある。

浄影寺慧遠は、『大乘義章』（大正四四・八三九頁中）に、衆生の心には一切の法を生み出す如来蔵があるので、相好の仏も生み出すことができるとし、『観無量寿経義疏』（大正三七・一八〇頁上）には、「是心作仏」は始学についていうもので、修行する段階より仏果をみて「作」といい、「是心是仏」は仏果からみたもので、諸仏の法身は「是心」と同体という。慧遠は『観経』全体を応身観とし、衆生にある如来蔵義の立場から、衆生の自性は清浄の仏性で、その仏性を観ずるという意味の「自性清浄仏性の観」という理観の立場で法界身という。

天台大師智顛は、『観経』を「心観為宗実相為体」（大正三七・一八六頁下）とし、始覚の妙解と本覚法性の理が相応し冥会するところに法界身が現れるとする。「是心作仏」は、法身が能応の仏（応身）として衆生心中に現れ、また始覚の三昧心により、本覚の理の法身が現れ、自己当果の仏を成ずることとし、「是心是仏」は、この心がそのまま仏であると心因と仏果の体一不二とした（大正三七・一九二頁中）。

また、嘉祥大師吉蔵は、『観無量寿経義疏』（大正三七・二四三頁下）に、観仏に法身仏を観想する観と、如来（応身）の三十二相等を念ずる観との二種を示し、法身すなわち法界と捉えている。また、「是心三十二相八十種好」を応身、「是心是仏」を法身、「是心作仏」は二身の因を明かす釈とする。すなわち、『観経』像観は、法身を観ずることのできない鈍根の者の観法で応身観とし、法身観とは異なる観法と捉え、阿弥陀仏を観ずるは化仏身を観ずるところに限定され、「諸仏如来」は阿弥陀仏ではなく無色無心の法身とする。この観法理解も「自性清浄仏性の観」と見られよう。

また、唯識法身観について、『釈浄土群疑論』（大正四七・六六頁上）に、「是心作仏是心是仏」を唯識所変で釈し、心の外に別法なく、万法はすべて心の変現で、この心によって仏を観ずるとした。見分（主観）の力が相分（客観）を現ずるを「是心作仏」、相分がそのまま自証分の心で別体がないことを「是心是仏」という。

一方で、浄土門において曇鸞大師は、『往生論註』巻上の身業功德釈（聖典全書一・四七四～四七五頁）に、「法界」を「衆生の心法」、「心を名づけて法界」と述べ、心は世間・出世間のもろもろの事象を生起し、「色」等の眼識を生ずるように、諸々の如来の相好身を生起する。「身」は、諸仏如来の仏身とし、衆生の能観の意識の上に相好の仏身を縁じる「法界所生の身」という義で法界身を釈される。「是心作仏」は、心よく仏を作るということで、衆生能観の心が仏の相好仏身を生じ、「是心是仏」は、心のほかに仏ましまさずとして、能観の心の上へ弥陀の相好仏身が現じたこととする。衆生心と法界身とは能所の違いがあるから不一であるが、能観の心に仏が顕現した時、心の外に仏身はないから不異である。これを木と火の譬をもって、「火」を所観の仏身・仏の相好身、「木」を衆生の能観の心と譬えて、木が火のために焼かれて火となるのは、心外無仏のことで、能観の心と所観の仏が体一となることを「是心是仏」とする。

また、善導大師は「定善義」（聖典全書一・七四三～七四四頁）に、「法界」とは所化の境で、諸仏の大

悲が心に応じて現ずる(応心即現)世界とする。それは、大慈悲が遍満し(心遍)、仏身が形をとって顕現し(身遍)、何時でも何処でも誰の上にも現れる(無障礙)世界である。したがって、「法界」とは所化の境界の衆生界で、「身」とは、大慈悲心に随う能化の仏身すなわち阿弥陀仏である。「是心作仏」は、自らの信心によりて相を縁ずるは作のごとし、「是心是仏」は、心よく仏を想へば、想によりて仏身現ずと積し、法身の阿弥陀仏は法界身で、大悲が所化の衆生界に常に応じる相好身であると見ている。

このように、浄土門では不二を全うした而二の立場、凡夫を対象にした差別の立場から法門が建立されることから、事仏身より法界身を見ていく。

宗祖においては、直説的には「法界身」に関する解釈はないが、『唯信鈔文意』(聖典全書二・七〇一～七〇二頁)には、如来は微塵世界にみちみち、それが一切群生海の心であると述べられて、誓願を信樂するが故に、この信心すなわち仏性なりとされる。また、存覚上人は『六要鈔』に「弥陀法界身の故に、帰命の心を発せば機法不離にして必ず往生を得」(真聖全二・二九九頁)と示される。

『信文類』一念転積(聖典全書二・九五～九六頁)では、信一念は願力回向の眞実信心で、聞名一念に眞実信心が成就する事は、阿弥陀仏の金剛心、願作仏心度衆生心、あるいは大菩提心、大慈悲心が無量光明慧たる弥陀の智慧によって衆生に成就するとされる。またその後、曇鸞大師と善導大師の「是心作仏是心是仏」の釈文が引用されている。

「是心作仏」の「是心」とは、願力回向の信心であり、「作仏」とは、「仏となる」と読めば、その信心が往生成仏の正因であるから仏に成るという意となり、「仏をなす」と読めば、その信心は名号の力用によって仏心と凡心が一体となったという意となる。前者の意では、「是心是仏」は、願力回向の眞実信心以外には成仏の因がないという義となり、信心が仏道の正因であるのは、それが大菩提心であることによると示される。よって、木と火の譬は、「火」である大慈悲心・仏心のはたらきを離れては、「木」である凡夫の心に信心は生ぜず、木は火に焼かれて火となるように、他力の菩提心によって、凡夫は仏とならしめられることを譬えている。

法界身とは、迷いの衆生界にはたらく仏身をいい、具体的には光明・名号となって活動する仏身、すなわち阿弥陀仏をいう。宗祖は、「是心作仏是心是仏」の文についても、名号聞信の一念において、願力回向の信心こそが仏道の正因であることを積されたものと見られる。

以上